

Title	前川嘉一著 イギリス労働組合主義の発展：新組合主義を中心にして
Sub Title	The development of British trade unionism, by K. Maekawa
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.1 (1966. 1) ,p.94(94)- 97(97)
JaLC DOI	10.14991/001.19660101-0094
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660101-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前川嘉一著

『イギリス労働組合主義の発展』

——新組合主義を中心にして——

飯田鼎

第二章 新組合の成立

第三章 新組合主義と標準八時間制

第四章 新組合の特質

第五章 新組合主義と組織発展

第六章 労働組合と最低賃金制の発展

第七章 炭坑国有化運動

附論

結語

わが国の労働組合運動を研究する場合に、その企業別組合という特殊な組織形態が、たえずイギリスにおける職能別組合を意識せられたことは周知の通りである。わが国において、イギリス労働運動史への関心が比較的高いのも、こうした事情によつていると思われる。

ここにとりあげた前川氏の労作も、このような日本の労働運動の現実から課題を与えられて生まれたものであつて、序章の冒頭においてつぎのよう書いているのは、このことを物語ついている。

「構造的な歪みをもつて発展してきた日本資本主義が、労働組合運動に特殊性を賦与したことは周知のところである。しかしあが国の労働組合が、その特殊性にたいして、客観的な認識を欠き、特殊的なものの中に埋没してしまうとすれば、ますます、わが国の組合運動は歪みのある特殊なフィールドでの運動に陥らざるをえない。わが国労働組合の理論的未成熟、運動経験の蓄積の浅さは、外国労働組合から吸収して、補充されることが必要である。すなわち、資本主義の発展に対応する労働組合発展の一般的

的労働条件を確保するために、組合員の質的ならびに量的規制を行う「人員制限」を重視し、これによつて不熟練労働者を排除しようとする。一方においては、中央の権限をもつて下部のスト規制を行い、ストによつて生ずる諸支出の抑制をはかり、他方において有効な共済機能を行うようにしたのであつて、スト規制と共済機能とは職能別組合にとって楯の両面なのである」（二六一—二七頁）。

旧組合＝クラフト・ユニオンの特質について、すぐれた分析をみせてくれた著者は、新組合主義の形成、旧組合から新組合の推移についての分析にうつるのであるが、旧組合と新組合の性格の差異の強調に急であつて、新組合主義を必然化させるに至つた社会的・経済的諸条件——帝国主義段階における資本と労働との関係という視角からの——の理論的把握が不充分である点が指摘されると思ふ。もちろん著者は、各所に断片的にはその叙述を行つてゐるのであるが、わたくしは、一八七三年の大恐慌を契機とする独占段階において、資本と労働における新しい関係を大体つぎのように整理することが妥当であると考える。（一）資本の集中・集積とともに重化工業部門における独占化傾向の進行、カルテル、トラストの形成、すなわち企業規模の格差の増大、それに比例して少数の特權的労働貴族層と広はんな低賃金層の形成、（二）生産性の向上（相対的剩余価値の生産）——そのための条件として、資本による労働力の直接的把握——いわゆる科学的経営・管理方式の導入、労働強度の比類ないたかまり、（三）国内および国外における激甚な競争を媒介として、いわゆる技術革新の進展と熟練労働力の分解——不熟練労働に

よる熟練労働の代替ないし駆逐の可能性、全体としての労働力市場にたいする職能別組合の支配統轄力の減少。四資本の有機的構成の高度化と相対的過剰人口の増大。

新組合の形成は、こうした諸条件、独占資本主義のもとでの新たな諸条件の展開のもとではじめて必然化するのであつて、この点、本書は論証がやや不充分である憾みがあると思う。

著者は、不熟練労働者の組合としての新組合運動のピーコクをなすロンドン・ドック・ストライキについて、きわめて詳細な分析と叙述を行つており、この部分は描写が生き生きとしてまことに面白い。

しかし著者がもつとも力を注いだのは、新組合運動の組織原則と闘争形態およびその具体的目標としての標準八時間制と最低賃金制の問題であつたろう。第三章以下はその問題をきわめて詳細に論じているのであるが、とくに標準八時間労働日の要求の問題を中心として、労働時間の法的制限についての旧組合と新組合との差異を指摘し、旧組合が、熟練労働力市場の独占的支配を通じて労働力の供給制限と労資間の団体交渉をその政策の基軸としていたのにたいし、新組合は不熟練労働者を基盤とするところから、労働条件の改善は、旧組合のように労働力の供給制限ではなく、労働時間の短縮を法制化しようとする動き、あるいは最低賃金制の確立のように、労働条件改善のための闘争を、ひたすら法的制限に集中しようとした点を強調している。そしてそのような不熟練労働の組織として、ドック労働者、ガス労働者、建築工、鉄道従業員、炭坑労働者の組

法則性が把握され、それにもとづくわが国労働組合の特殊性が認識されて、その発展も期しえられるからである。すなわち著者は、あくまでも、わが国の労働組合運動の理論的認識のためにイギリス労働組合、とりわけ独占段階における新組合運動を重視されるのであり、この点、問題意識がきわめて鮮明なのが注目されよう。つぎのような内容から成つてゐる。

合をあげ、こうした不熟練労働者を中心とするいわゆる一般労働組合の発展が、合同機械工組合のような閉鎖的な熟練労働者の組織にも影響をあたえ、「職能別組合としての中央集権的組織体制から地方的団体交渉機能に対応する組織機構への変化」、「工場別段階の交渉機能と産業別全国交渉機能に対応する組織への再編成」、換言すれば「産業別組織への発展」（一四〇頁）を必然化するとのべられている。著者の、「職能別組合の産業別組合化には、新組合主義が促進の役割を果したことである」とする主張が正しいことはいうまでもないが、ただしかしひとつ問題があるのでなかろうか。イギリスにおける産業別組合運動はたしかに一八八〇年代における新組合主義が契機となり、この運動の成果を基盤として発展し、とくに八時間労働制と最低賃金制を運動の主要目標として組織の編成を行ったことは事実であるとしても、この当時、すなわち新組合運動のピークの時期に、組織化がまったく行われず、それどころかイングランドの不熟練労働者に比べて絶望的に不利な状態にあつたアイルランドの不熟練労働者の運動、彼らが産業別労働組合の闘争に忘れる事のできない偉大な役割を果したことを思うとき、この点が本書ではなくふれられていないのはどうしたわけであろうか。

ルランドの不熟練労働者を組織し、歴史的なベルファストの運輸労働者を指導したジム・ラーキン (Jim Larkin) の運動、こうしたアイルランドにおける低賃金の不熟練労働者の闘争は、一九一一年、アイルランド運輸労働組合 (The Irish Transport Union) の結成とともに一段とほげしくなり、ダブリンにおける運輸労働者、すなわち荷車の御者、波止場労働者その他あらゆる種類の労働者のゼネ・ストをもたらすのである。一九一三年にはダブリンの市内電車従業員のストライキというよう、第一次世界大戦直前のいわゆる「産業上の大不安」の一翼を形成し、少くともそれは、産業別労働組合主義運動において、イングランドの新組合主義とはおのずから違った地位をしめるものではないだろうか。またその両者の関係は、産業別組合の形成という観点でどのように関係し合っていたのであるか。およそこのような視点は本書には全く問題とされていない。その意味で、本書は、職能別組合から産業別への再編成という問題において、かなり深い分析を試みながら、視野の広さにおいてやや欠けるところがあるのでなかろうか。

のできない偉大な役割を果したことと思うとき、この点が本書ではなくふれられていないのはどうしたわけであろうか。

行論のうちにはまったく展開されていないようだ。これを要するに、本書は、独占的段階におけるイギリス労働運動についてのすぐれた数少ない労作のひとつであるが、やはり論文集としての制約をまぬがれていないと思う。

以上思いついたままに燕雑な論評を試みたのであるが、著者の真意を損ねた点が多くあると思う。この点については、御寛恕を待つのみである。私は本書によつて實にいろいろなことを教えられ、且つ刺激をうけた。何よりも、労働運動史研究が陥りがちな事件の記述、資料の羅列に終らず、實に分析的に問題を把握している点、著者の長年の研鑽がにじみでているように感じられる。また労働運動論を労働市場論のなかに解消してしまつよう最近の誤まつた傾向にたいして、著者は、組織論・運動論を重視されており、この点についても教えをうけることがきわめて多かつた。今後、著者が労働運動の比較研究において、一段の前進をされることを期待してやまない。(ミネルヴァ書房・一九六五年九月刊・B6・三〇一頁・六五)

いまひとつ、著者はその序文に見る如く、わが国における企業別組合の特殊性に触発されて、独占段階におけるイギリス労働運動の研究に没頭せられたわけである。とくに産業別組合の問題が、わが国の労働組合運動にとって緊急の課題になりつつあるとき、このような問題設定には非常に鋭いものがあることは読者として何人も否定しないであろう。しかし本書のなかには比較研究への姿勢は——イギリスと日本との——意図としては充分わかるけれども、実際にはから考えてみよう。

行論のうちにはまったく展開されていないようだ。これを要するに、本書は、独占的段階におけるイギリス労働運動についてのすぐれた数少ない労作のひとつであるが、やはり論文集としての制約をまぬがれていないと思う。

以上思つたままに雑な論評を試みたのであるが、著者の真意を損ねた点が多々あると思う。この点については、御寛恕を待つのみである。私は本書によって実にいろいろなことを教えられ、且つ刺激をうけた。何よりも、労働運動史研究が陥りがちな事件の記述、資料の羅列に終らず、実に分析的に問題を把握している点、著者の長年の研鑽がにじみでているように感じられる。また労働運動論を労働市場論のなかに解消してしまうような最近の誤った傾向にたいして、著者は、組織論・運動論を重視されており、この点についても教えをうけることがきわめて多かった。今後、著者が労働運動の比較研究において、一段の前進をされることを期待してやまない。(ミネルヴァ書房・一九六五年九月刊、B6・三〇一頁・六五〇円)

大野吉輝著
『巨視的分配理論』

富田重夫

ここに書評しようと思う大野氏の「巨視的分配理論」なる書は生

産要素間の分配率、あるいはいわゆる相対的分前 relative share に関する研究を主眼とすものであるが、まずこの研究の現代経済学の今日的方針における意義を、理論的および現実的側面から考えてみよう。

まず現代の経済理論の中核を形成するものはやはりケインズ経済学をその出立点とし、その基礎の上に立つて発展しつつあるものであるといってよいであろう。その発展の方向は、ケインズ理論の巨視的分析手法をとりつつ、その短期静学的制約を克服し、その長期動学化を企図するものである。そしてこの長期動学化の方向として、一つには乗数理論と加速度原理の統合による景気循環の理論があり、他方に投資の乗数効果と生産力効果の二重性に着目して、需要增加と供給能力増大のバランスの問題を中心課題とする経済成長理論が、幾多のすぐれたポスト・ケインジアンによって形成された。ところで第二次大戦後一部に存在した将来に対する悲観的予測にもかかわらず、自由諸国現実の経済はむしろ強い成長趨勢を示したのであって、このことは前述の二つの方向のうち経済成長理論に対する圧倒的関心を経済学者にもたらしたのである。その意味で理論経済学の今日的問題も主としてこれに関連しているといえよう。たとえば均衡成長の安定性の問題(二部モデルによる安定性の問題を含めて)やいわゆる体化された embodied 技術進歩、あるいはヴァンティジ vintage 接近による成長理論の再構成など、成長理論の実証的 positive 側面に関する分析もそうであるし、また動学的厚生

大野吉輝著

巨視的分配理論

富
田
重
夫

ここに書評しようと思う大野氏の「巨視的分配理論」なる書は生